

「在日コリアン寺院」である宝巖寺の 薬師霊場巡りへの参加

宮 下 良 子

《調査概要》

平成28年度井上円了記念助成の大型研究（「アジアにおける国境をまたぐ生活スタイルの研究—東アジア・東南アジア・南アジアの比較を中心に」）による個人調査は、「在日コリアン寺院」でありながら、宗派が日本の臨済宗である宝巖寺の年中行事（薬師霊場巡りバス旅行）への参加であった。宝巖寺の住職である金光徳氏の父で、先代住職の金慧輪氏の代から実施している本行事は、今年で19年目になるが、金慧輪氏没後、子息の金光徳氏が引き継いでからは13年目になる。先代住職は、済州島出身であり、京都の万寿寺で朝鮮仏教を学び、現在の在日韓民族仏教徒総連合会（韓仏連）の礎となる仏教組織の設立に貢献した人物であるが、現住職は花園大学を卒業し、臨済宗で得度している。そして、臨済宗であることから、毎月第一日曜に実施される「座禅と法話の会」に参加する日本人信者は少なくとも12、3人であり、「在日コリアン寺院」の中でも日本人信者の割合が高い。そのような信者たちと住職の薬師霊場巡りを参与観察することにより、日本人と在日コリアン信者たちがともに霊場巡りをするにどのような現象が見出せるのか、ということが今回の調査の目的であった。

《調査期間》

2016年11月22日～24日

出張先：大阪市生野区、奈良県桜井市、三重県多気郡

《調査スケジュール》

11月22日

翌日の23日、大阪市東成区の宝巖寺前を8時30分に貸し切りバスで出発するために、生野区鶴橋に前泊した。

11月23日

① 午前8時に地下鉄千日前線の新深江駅に着き、歩いて宝巖寺まで行くと、数人の信者と「在日コリアン寺院」である宝塚不動産住職の釈清剛氏がすでに待機していた。釈氏は韓国からのニューカマーで、曹溪宗の僧侶であるが、渡日後、金光徳氏関わっていた広島国際禅寺で2年間修行していたこともあり、師弟関係にあるため、毎年、薬師霊場巡りに参加している。筆者とも生駒山の在日コリアン寺院の悉皆調査以来、7年間の付き合いがある（研究成果は『聖地再訪 生駒の神々』[2012]）。釈氏は、2015年に生野区の「在日コリアン寺院」である観音寺近辺に宝清寺を設け、宝塚と生野を往復しており、金光徳氏を介して、翌日の24日に宝清寺についての聞き取り調査を依頼

していたが、その話は通じておらず、改めて調査依頼を申し出ると、24日は他の用事があるために、本行事終了後に宝清寺へ移動してインタビューを行うということになった。

② 出発時間になり、宝巖寺次期住職である金光徳氏の子息家族の見送る中、バスに乗り込むと、当日の案内役の兵庫県西宮支部の民団関係者の金氏のあいさつがあった。参加者人数は、25名であり、そのうちの、金光徳氏、釈清剛氏、民団の金氏を除くと、22名（筆者も含む）の信者の参加だという報告があった。貸し切りバスの始発は西宮北口であり、そこからの参加は、金氏を含む信者数人であった。ちなみに昼食代を含む参加費は1万円である。バスの中では、釈氏、民団の金氏により、当日のスケジュール表、A4一枚の般若心経、みかんや飲み物等が配られた。

薬師霊場巡りとして来年が最終年となることもあり、今年は、神宮寺（三重県多気町）西国四十九薬師霊場第三十五番を残すのみとなり、まず、三重県の神宮寺に到着した。神宮寺は正式には「女人高野丹生山（にゅうざん）神宮寺成就院（真言宗山階派）」といい（山号は丹生山）、通称の丹生大師は空海（弘法大師）に由来する。そこで、住職の説教を聞き、参加者全員で金光徳氏を先頭に般若心経を唱えた。

その後、神宮寺前にある土産物店「ふれあいの館」で、買い物をし、バス移動となった。昼食は、津城公園を通り抜けたところにある「寿音」という和食店であった。食事後の信者同士の雑談から、今回の参加者の中には、宝巖寺の親族が6名参加していること、日本人の参加が1名（宝巖寺の親族）であり、ほとんどが在日コリアンであること、そして、かつては、貸し切りバス2台でも乗り切れないほどの信者が参加していたこと等がわかった。

アジアにおける国境をまたぐ生活スタイルの研究——東アジア・東南アジア・南アジアの比較を中心に——



写真1 神宮寺（筆者撮影）



写真2 神宮寺の薬師堂（筆者撮影）



写真3 津城公園内（筆者撮影）



写真4 長谷寺の登廊（筆者撮影）

③ 先述した通り、薬師霊場巡りは終盤を迎え、宝巖寺の年中行事として、次は、西国観音霊場巡りが予定されており、そのスタートとして、今回は奈良県桜井市の長谷寺（西国三十三所観音霊場第八番）を参詣する目的で、三重県から奈良県への移動となった。長谷寺は真言宗豊山派の総本山であり、山号は豊山である。徳道上人によって、西国三十三所観音霊場が開かれ、その根本道場とも呼ばれている。本堂までの登廊は長さがあり、階段になっていて、健常者でも大変なので、高齢者や車イスの信者は車移動となった。10メートル余りの観音像の前で、再び、金光徳氏および信者で般若心経を唱えた。その後、西名阪、近畿道を通り、異で数人の信者がバスから下車し、残りの参加者は全員、宝巖寺へ帰着した。そして、バスは民団の金氏と西宮近辺の信者を乗せて、西宮北口へと再び出発した。また、宝巖寺への帰着が予定より遅れ、19時近かったので、宝塚不動院および宝清寺の住職である釈氏へのインタビューは後日ということになった。

11月24日

午前8時過ぎに宿泊先の生野区鶴橋駅から、新大阪経由で東京に帰着した。



写真5 長谷寺本堂（筆者撮影）

《成果と課題》

今回の調査の目的は、在日コリアン寺院の日本人、在日コリアン信者たちの、日本仏教との関わりについて参与観察することであった。宝巖寺は先述したように、住職が在日コリアン二世であるが、臨済宗妙心寺派であることから、信者たちもその出自に関わりなく、彼ら／彼女らの宗教は臨済宗にもとづくものであるということは想定内であったが、今回の霊場巡りへの信者の参加が1名を除き、全員が在日コリアンであるということは筆者にとっては意外であった。それは、同じく「在日コリアン寺院」の参尊寺（金峯山修験本宗）の年中行事である水陸祭に、筆者が昨年参加した時にも見られた傾向だった。ただ、「座禅や法話」や、大峰山修行・登拝には、日本人信者の参加が見られる。このことから、日本人信者たちは信仰には重きを置くが、宗教を通した在日コリアン信者たちとの親睦にはあまり関心がないのではないかと推測する。

また、年々、参加者が減少している背景には、先代の住職の時代から宝巖寺の信者であり、寺を支えてきた在日コリアン一世が亡くなり、信者の世代交代が円滑ではないことが挙げられる。それは、韓仏連の在日コリアン寺院に共通する課題であり、その中でも、宝巖寺は2000年頃から、日本の葬儀社と契約してからは、葬儀の9割が日本人だということで、実際に日本人信者を獲得しており、その転換は寺の継続、継承につながっているように見受けられる。

そして、今回、宝巖寺を創立した先代住職の妻であり、金光徳氏の母親（80歳代後半）にお会いしたことは、感慨深いものであった。それは、宝巖寺の歴史、すなわち、在日コリアン寺院を通して定住コリアンたちがたどってきた宗教的実践を体系化してきた筆者にとって、彼女はまさしくそれを体現している人であるからだ。

宝巖寺に見られるように在日コリアン寺院は確実に世代交代が進行している。今後、さらに継続してその動向に注目していきたい。

(客員研究員)